元戦闘指揮官の行方

ブリッツ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後方幕僚（何でも屋扱い）と戦術人形のお話

旧タイトル：指揮官の行方

目次

1話　最悪の日 ―― 1
2話　目覚め ―― 5
3話　来訪と雇用 ―― 7
4話　退院と迎え・護送 ―― 12
5話　着任と初仕事 ―― 15
6話　局地的反攻作戦と撤退 ―― 18
7話　本部会議 ―― 23
8話　S地区制圧後の引き継ぎと約束 ―― 29
9話　本部後方幕僚正式配属 ―― 31
10話　補給不足 ―― 33
11話　短期出向 ―― 37

1話　最悪の日

ドーン、ドーン、ダンダン、徐々に戦火の音が近づいて来る。
流石にこれ以上は逃げられんか・・・　と一個分隊にまで減った中隊を
見ながら考えていた。

事の始まりはE．L．I．Dどもの代移動の経路にあった自国
だけでは抑えきれない判断したK共和国が様々なPMCに応援の依頼を
出したことが始まりだった、足りない穴埋めに集まったのは計6社だった。
それも大手ばかり、大隊規模を擁する3社と中隊規模のわが社、
それとI．O．P社と業務提携し戦術人形を傭兵業に使いだしたG&amp；K社
軍にも採用されるなど世界トップシェアを誇る鉄血工造株式会社
当初戦線は鉄血が中央、大隊大隊規模がその左右に左翼の大隊の
隣にわが社、G&amp；Kが後衛予備として戦いが始まった。
戦闘開始から3時間ほどで主だったE．L．I．Dは殲滅が完了し、
帰還許可が出るまであと少し、というところでそれは起こった。
突如として鉄血が左右のPMCに対して攻撃を始めたのだ。
当然のことに奇襲を受けた2社は瞬く間に壊滅、私は隣を受け持っていた
社の兵士が逃げ込んだ来たことで初めて状況を理解した。
すぐさま私は全員に撤退する事を告げ用意を始めさせた
聞く限りこちらの戦力が少なかったためか鉄血はこちらにむけた兵力は
参加した鉄血の2／5ほどらしいとは言えまともな反撃も出来ず壊滅した
らしいので敵の数は対して減っていないだろう・・・

三分で集合した部隊を車に乗せ移動を始めて十分が過ぎた頃、
我々は完全に油断していた後方のＧ＆ａｍｐ；Ｋ社と連絡を取り合い合流地点を
決めていた時、突然先頭を走っていた車両が吹き飛んだ。
その時はあまりのことに理解が追い付かなかった。
何故ここに鉄血が？と思ったからだ、部隊に降車を命じ私も車両の
陰から何処から攻撃を受けているのか探った、
不幸か否か敵は我々の左側、後ろ寄りの地点に展開しているようだ、
部隊をまとめて動かすことは無理だと悟った私は小隊ごとに三方向に
散らばるように撤退するように小隊長に命じ私は初撃で人員の減った
部隊を率いて逃げることにした。
鉄血の足が早い少数部隊の攻撃攻撃を躱しつつも撤退する我々を
突然爆風が襲った今までの攻撃では無かった攻撃に驚きつつも後ろを見ると
若干固まって動いていた分隊が消えていた・・・ そのことに唖然としていた
私を嘲笑うかのように更に攻撃が激化した、鉄血側を見ると仁王立ちしながら
大砲のようなものを付けた少女が見えた、噂のハイエンドモデルか？と
思いつつ生きてる部下にスモークを展開するように命じた。
スモークグレネードを持ってる部下数名が投げると我々の目の前に煙の壁が出来た
のを確認した我々はすぐさま撤退を再開した・・・

先ほどの戦闘から一時間が経過した頃、Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ社から連絡が来た内容は
こちらもハイエンドモデルの奇襲を受けて部隊に損害が出たこと

とハイエンドモデル
を撃破した報告だった、そしてこちらをヘリで回収してもいいと言う提案だった
予想外の提案に驚きつつも了承し、回収地点を教えてもらうとここから二キロ離れた
ところだった、そこで部下に回収地点近辺に地雷などでブービートラップを
作り鉄血を待ち伏せた、回収のヘリが着く三十分前ごろに遂に鉄血が姿を現した
まずはスモークが展開された、鉄血はお構いなしに突っ込んできたが
先頭を走る人形がまず吹っ飛んだ、グレネードランチャーを撃つ事で
地雷をカモフラージュしつつ数を減らす事を優先した罠に未だに地雷とは気付かなかった
ようだ、偽装に満足しつつそろそろ二つ目の罠か・・・ などと考えていると
奥にあのハイエンドモデルが見えた、部下に隠れろ!!と叫んだが遅かった
罠事吹き飛ばすように我々の周りを耕すように蹂躙する攻撃に周りが土煙で見えなくなる。
煙が晴れると目の前には地獄が広がっていた、部下は二・三人しか無事な者は見えず、
他は人体に欠損が見られ明らかに息絶えている、奥には鉄血の部隊が近づいてくるのが見えた
ここまでかと半ば諦めていると、音がした・・・ 時計を見ると予定の時間だいけない!!
ヘリが落とされると無線で来るなと伝えようとするが壊れているのか送信されない、
すると女性の声で「伏せろ!!」と無線から聞えたヘリが見えたとき何かが射出されるのが見えた

鉄血のいるほうから轟音が響く、そちらをみると人形が吹き飛んでいるのが見えた。

ヘリからＧ＆ａｍｐ；Ｋの人形が下りてくるのが見えた私は気が抜けたのか気絶してしまった・・・

2話　目覚め

ピ、ピ、ピ、一定のリズムで電子音が響くのが聞こえる・・・
ここは何処だ、確か最後は・・・
そうだ！部下は！と気を失う前の記憶が甦り、
急いで体を起こそうとするが、全身に痛みが走り起き上がる
ことが出来ず、ただうめき声だけが出るだけだった。
側に誰か居たのか、うめき声を出す私の声に気付いたようで
直ぐに「ドクター!!彼が目覚めたぞ！」と大きな声を出しながら
部屋を飛び出して行った。
痛みが治まって来たので、部屋を見渡すと広い部屋に私だけの
ようで、医療機器以外は椅子が二つしかなく他は何も無かった。
先ほど出て行った人が医師を連れてくるだろうと思い、
只、天井を何もするわけでもなく見上げていた、
二分ほどするとＭ１９２１を持った女性と医師と思われる三十代
後半と
思わしき男性が入って来た。
医師「目が覚めたようですね、意識ははっきりしてますか？」
「はい。」
と返事したが、喉からのは非常にか細い声だった事に
自分で驚いていると女性が水の入ったストローの刺さった容器を
口元に近付けてきたので「ありがとう」と言い、手で受け取った。
動けるとは思っていなかったのか二人とも驚いた表情をしており
それが面白かったので笑うと、二人とも感心したような目で見てき
た。
医師「驚きましたよ、まさかか十日間も寝ていたのにすぐに動ける
とは。」
今度は私が驚く番だった、あの出来事から十日間もたっているとは
思わなかったからだ。
「部下はどうなった？」
そう問うと女性が答えた。

女性「アンタの部下は五体満足なのが３人だけで、後は傷が酷かったせいで・・・」
そこまで言うとあとは言いづらいのか言葉に詰まってしまったようだ。
「そうか、教えてくれてありがとう。」
そう言うと彼女は少し居心地が悪そうにしながらも
「いや、大したことじゃ・・・」と気まずそうに返した。
するとそれまで黙っていた医師が状況の説明を始めた。
どうやら私は四肢の欠損は無いが少なく無いけがをしていて
血の流し過ぎでここに運ばれたようだ、ほかの三人は
そう言ったことも無かったので、すぐに会社に戻って行ったそうだ。
そこまで言うと医師はこんな言葉を残して部屋を後にした、
「明日の午前にＧ＆ａｍｐ;Ｋのクルーガー氏・ヘリアントス氏お二方が面会に来ます。」
その言葉の意味に悩まされながらも取り敢えず残っている彼女にいつまでここにいるのか聴くと意外な言葉が返ってきて私は本日何度目かの驚きに包まれることになった。
女性「私かい？シカゴタイプライターだ、夜露死苦な!!」
彼女が確かにそう言ったからだ。

3話　来訪と雇用

朝、目がさめると昨夜戦術人形と判明したトンプソンが私のベッドに
上半身を乗せるよう寝ていた。お陰で柔らかい感触が腹の辺りにあり
少しだけ身じろぎしたが、動くのを辞め彼女の顔を見ることにした。
起きているときはどちらかと言うと軽いノリの小洒落たお嬢さんな
印象だったが、こうして寝ている姿を見るとそうした姿からは想像出来ない
可愛らしい寝顔をしている。
その寝顔をしばらく見ているとふと時計を見てみた七時になる五分前だった。
そう言えば今日はG＆ａｍｐ；Kからクルーガー氏とヘリアントス氏が来ると言ってたなと
思い出していると、扉が開いた。
医師が入って来た、続くように二人の男女が入って来た。
トンプソンの様子を見て微笑ましいものを見るような顔をして
医師「おはようございます、まずは体調の確認を行いましょうか」
と言い、診察を始めた。
途中服を脱いだ時に女性のほうが食いつくように見てきて、
その姿を隣りの男が呆れたように見つめた後、私の肌を見て目を細めていた。
私の傷痕が多い体を見て・・・
診察が終わると医師が
医師「この様子なら、体の治癒が早いですね・・・　これなら明日には
　退院しても大丈夫でしょう。では私はこれで。」
「ありがとうございます。」私がそう言うと手を振りながら出て行った。

しばしの沈黙の後、男が口を開いた。
クルーガー「私の名前はクルーガー、こっちはヘリアントスだ。」
「私の名前はシリウスです。」
クルーガー「知っているさＰＦ所属の戦闘指揮官、そしてうちで働いてるカリーナの兄
君が書いた戦闘教本はうちでは好評でね。」
「良く調べてますね、あれは戦闘教本なんて言えるモノでは無いですし、
第一に著者名は私の名前では無い筈なんですけどね・・・・・・ カリーナは元気ですか？」
私がそう聞くとクルーガー氏とヘリアントス氏は顔を見合わせて笑い出した。
クルーガー「随分と自己評価が低いようだね、君の妹は・・・ まあ、元気さ・・・
後方幕僚としてとても優秀でね、私も助かっている。」
クルーガー氏は何やらヘリアントス氏に視線を送ると私は何も知りませんとでも
言いたいかのように視線をそらした。
・・・ どうやら元気だが別の問題を起こしているようだ。
「げ、元気なのならよかったです、事務処理のやり方は一応は教えていたので
お役にたっているなら何よりです。」
それを聞くと二人は目を輝かせて迫って来た。
ヘリアントス「あの事務処理能力は貴方仕込みだったのか!!」
二人は少し離れてからひそひそと話始めた、はて？そんなに言われるようなやり方を
教えたつもりはなかったのだが・・・ 五分ほど話していた二人は話がまとまったのか
こちらに寄って来た。
クルーガー「実は今日君に会いに来たのはほかでもない、君をヘッドハンティングに来たのだ、

君の所属しているＰＦの社長には既に了承を得ていてね、後は君の返答次第なのだよ。」
「既に社長に・・・ しかしながら私は部隊を壊滅させています、そんな私をなぜ？」
クルーガー「実は今回の件は、君の社長からの頼みもあってね。君が自分を責めているだろうし
今回の事で会社の規模を縮小することにしたらしくてね、君はうちには宝の持ち腐れ
だからそっちで使ってやってほしいと相談を受けてね・・・」
うちの社長がクルーガー氏が知り合い？意外な人のつながりを感じながらも私は社長が
私のことをまだそんなに言っていることに思わず目に涙がにじんでしまいながらも
「分かりました、お受けしましょう。それで私の待遇はどのように？」
クルーガー「それなのだが、君には後方幕僚を具体的に言うならばこのヘリアンの
副官をしてもらいたいのだ。」
私がいきなり副官？一体何のドッキリだと思っていると彼は続けた。
クルーガー「副官と言っても一か月は普通の後方幕僚としての仕事に慣れてもらい
その後、ヘリアンに副官というよりはアドバイザーに近い事をして欲しいのだ。」
「アドバイザー・・・ ですか？」
ヘリアントス「そうだ私の補佐のほうが多いが、戦略戦術における判断が必要になった時に
私にアドバイスをして欲しいのだ、どうだろうか？」
確かにすぐに部下を持てと言われるよりはよほど良い。
「分かりました、いつから出社すればよろしいでしょうか？」

クルーガー「うちは指揮官等の住居はすべて基地にあるのでな、明日迎えを寄こす
出社は８日後にしておく、基地の設備は明日から使えるようにしておくから
好きに使って体調を整えてくれ。」
ヘリアントス「期待している。」
二人はそう言うと部屋を後にした・・・　Ｇ＆ａｍｐ；Ｋのツートップがここに一時間も居られるなんて
会社としての土台がしっかりとしているのかな？なんて思いながらトンプソンに
「いつまで寝たふりをしてるんだい？」と声をかけると
「いやぁ、起きたらうちのツートップと話してるもんだからなぁ？それにあんたが
ずっとアタシの頭を撫でてただろ？意外と気持ちがよくてな、つい。」
悪びれる様子もなくそう言っているので思わず苦笑いしながら
「もっとしてやろうか？」
と茶化すように言うと「本当か!?」なんて言いながら丁度良い位置に頭を差し出してきたので
頭を撫でながら「口は禍の元・・・　か…」というと撫でることに専念した。

～廊下～
ヘリアン「良かったですね、優秀そうな後方幕僚が採用できて。」
クルーガー「アイツたっての願いだってだからな、しかし戦闘指揮官は増え続けているが
それを支える後方幕僚が少ないのではな、今回の採用が後方で働くものに
追い風になれば良いのだがな。」
ヘリアン「そうですね・・・」
そんな会話をしながら二人は、この後の仕事の山に頭を抱えたく

なっていたのだった…

４話　退院と迎え・護送

昨日のＧ＆ａｍｐ；Ｋトップの電撃ヘッドハンティングから一夜空けて、
私はトンプソン（護衛らしい）と二人で病院のエントランスで
迎えの人を待っていた。
「なぁ・・・トンプソン、そういえば迎えは何時来るんだ？」
「あぁ、それなら向こうが出るときに０９００って言ってたぜ？」
「今、１０００だぞなんかあったんじゃないのか？」
「大丈夫だろう、一応はＡＣＥ部隊だからな。」
「そんなＡＣＥが・・・ん？」
目の前に人が立ち止まったのでそちらを見ると女性が立っていた。
「シリウスさんで間違いありませんか？」
「遅いじゃないかスプリングフィールド、こいつがシリウスで間違いないぜ。」
私が何か言うよりも早くトンプソンが答えた。
「ほら旦那、迎えが来たことだし行こうぜ。」
「スプリングフィールドさん？シリウスです、宜しくお願いします。」
「こちらこそシリウスさん宜しくお願い致します。」
そんな社交辞令をトンプソンが「私の時と違わないか？」
なんて独り言を言っているのをスルーして彼女が他の護衛と思われる子の
もとへ歩いていくのに付いて行った。

～車内～
今回の護衛は１００式・９２式・ＦＡＬ・６４式自とスプリング
フィールドの
編成だそうだ、普段はスプリングフィールドではなくＭ１４らしい
が
今回は昨日の作戦で損傷したらしく代わりに彼女になったそうだ、
最適化が７５～８５らしく彼女はまだ５０％後半らしくいつもは

同じレベルの子と
偵察や巡回任務、時に大規模作戦や共同作戦に随伴しているらしい。
今回のＡＣＥ部隊はヘリアンさん直属の部隊の一つらしい。
他にも二つ名持ちの第二部隊など意外にも部隊数は多いらしい。
「他の最適化が９０％台の子はほとんど最前線なので私達は珍しいほうです、
後方で最適化が進んでいても６０％になれば即応部隊か大きい補給基地に
配属ですから。」
そう言う１００式は黒いセーラー服と機関銃という組み合わせで
今はもうない日本という国の映像作品にそんな名前があったかな？
なんて古い記憶を振り返っていると扇情的な格好のＦＡＬが私をじろじろと
見て来たので見つめ返すと少し沈黙が起き、彼女は問いかけて来た。
「貴方があのカリーナの兄って本当？彼女とは少し雰囲気というか
少し違うように見えるけど」
「そうだな・・・ カリーナは自分の出自を君たちに話したかい？」
「いいえ、その辺は話してくれないわ、ただ私には勿体ないくらい
出来た兄が居るとは言っていたわ。」
「そうか・・ ならあまり深く言えないな、カリーナとは義理兄妹だ
教えられるのはこれだけだ・・ いいかね？」
「ええ、それだけでも十分よ、答えてくれてありがとう。」
彼女がそう言うと再び沈黙がその場を支配した。
「基地まではあとどのくらいかかる？」
「はい、後一時間ほどです。」
直ぐに答えてくれた１００式に「ありがとう。」と言うと
「いえ、たいしたことでは・・」とはにかみながら言う彼女に
やはり彼女たちは人にしかみえんな・・・ と端末を取り出し

イヤホンを耳にして音楽を聴きながら窓の外を流れる景色を見つめていた。

5話　着任と初仕事

「本日より着任しますシリウスです、改めて宜しくお願いします
　ヘリアントス上級代行官殿。」
　そう言い敬礼をするとヘリアンさんは苦笑している。
「ここでは敬礼は要らない、それと固っ苦しいヘリアンで良い。」
「分かりましたヘリアンさん、それで私の仕事は？」
「先ずは補給部隊に同行してもらう、私の下に入ったと他の基地の補給関係者に
　挨拶してきてもらうことになる、今後は後方幕僚として補給等のやり取りを
　するからなその為の顔合わせだ。」
　成る程、今のうちに顔合わせしておくことで今後の業務を円滑に進められるように
　という配慮か・・・　この人にはかなわないな。
「分かりました、所で目的地は何処でしょうか？」
「目的地は・・・　Ｓ―０９地区だ」

２０６２年
５月○×日
Ｓ―０９地区
１０４６
Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ本部のある地区から数時間してようやくＳ―０９地区の中央にある統括基地に着いた
　私達を喧騒が出迎えた、目の前を通り過ぎようとしていたツナギ姿のＧ＆ａｍｐ；Ｋ社員を
　捕まえた。
「騒がしいようだが何があった？」
「貴方は・・・　？それよりも大変です！鉄血の今までにない侵攻だそうです、
　さらに指揮官が行方不明だそうで・・・　指揮系統が混乱していると

説明に来た事務員が言っていました。」
一緒に来ていたトンプソンが
「ボス、ひとまず司令室に行こう。そこならもっと情報がある・・・ それに」
意味ありげにこちらを見てさらに続けた
「それにここの指揮官が不在ならこの場の最高責任者はボスだぜ」
「・・・ ひとまず司令室に向かおう、ヘリアンさんと話したい。」
そう言いツナギの彼に案内を頼んで司令室に急いだ。

～司令室～
１０５０
「ガリル小隊の損耗率２０％を突破しました！」
「ＳｔＧ４４から陣地の一時的な放棄の許可を求めています。」
そんなことを後方幕僚と思われる女の子に・・・ ん？あの後姿は・・・
「どなたか知りませんが現在司令室は・・・ 兄さん⁉」
その声に驚いたのかその場にいる皆が振り返った。
「話は後だ、この場の指揮は私が取って良かったんだよな、トンプソン？」
「ああ、ただしヘリアンの姉貴に許可を得たらだがな。」
「そうか・・ すまないが本部に連絡を取れるかな？それと現在の状況を
教えてもらえるかな？」
「はい、現在Ｓ―０９地区に対して鉄血による全面的な攻勢を受けています。
これに対して遅延戦闘を行ってはいますが敵の進行ペースが速いため・・」
「私だ、状況は把握している一時的に放棄することになった、その地区の指揮官が
その基地より後方で発見されたので逮捕するよう全基地に通達、これよりシリウス
君がその地区の一時的な最高責任者になる、いいな？」

「了解しました、最善を尽くします。」
「援軍だがまとまった戦力がＳ０９地区に到達するのは今から五時間後だ
基地にいる民間人の引き上げをできる限り引き上げて欲しい
無茶なのは分かっているが頼む・・・」
済まなさそうに言うヘリアンさんに「では。」と言い通信切ると
すぐ「ｓｔｇ４４に通信をそれと４４の両翼は誰だ？」
「ＭＰ５小隊とＭＰ４０小隊です！」
「そちらも繋いでくれ」「はい！」
直ぐにスクリーンに三人が映し出された
「現在指揮を任されているシリウスだ、ｓｔｇ４４の提案を許可する
ＭＰ４０・ＭＰ５はｓｔｇ４４と足並みを揃えて下がり、こちらの指示で
反撃してもらう」

「しかし、それでは戦線に穴が・・・」
ＭＰ４０が反論するが直ぐに引き下がった部隊配置に気付いたのだろう
「分かりました、ｓｔｇ４４と連携して後退します。」
そう言い三人はスクリーンから姿を消した・・・
では避難民の誘導計画を立てなければ、
気が付けば司令室は来た時と違い静寂が支配していた・・・

6話　局地的反攻作戦と撤退

〜司令室〜
１１１５

ｓｔｇ４４の一時的な戦術的後退をそのまま戦略的後退に変え、即座に反撃の為の
作戦の草案・修正を行い各部隊への通達を任せた私はトンプソンにお願いを
することにした。
「トンプソン少し話があるんだが……」
「駄目よ指揮官、私の部隊は貴方の護衛も任務に含まれてるの、戦線の穴埋めに
私達を使うことは許されてないわ」
話をトンプソンの横にいるＦＡＬに遮られてしまった、
そう言えばＦＡＬがいたか……
「そうは言うが、君に他に最善の策はあるかね？」
「でも私達を使わなくても何とか出来るんでしょ？貴方は。」
「より最善を掴むためだ、それに君達に出てもらわなければこの地区に元々いた者達の
損害が馬鹿にならん、私は出来る限りの事をするように指示を出されている、
君もやり取りを見ていただろ？」
「……分かったわよ、そこまで言うなら聴いてあげる、ただし後退した防衛線の
この基地よりの所を一時的に防衛するだけよ？」
「それと反撃時の一時的な前進も頼みたい、そんな顔するな君達は三キロほど前進したら早々に
この基地に戻ってきてもらわなければならん、そんなに突出部を相手に維持させない
約束しよう一時間だけだ。」

「分かったわ、Ｄ―５に行けば良いのね？」
Ｄ―５はこの基地から２０キロ程北北西に行った所で
こちらが誘引する鉄血の最大進攻地点予定の場所である……
「そうだ、君達が着いた早くても１０程でその地点の隣にｓｔｇ４４の小隊が後退してくる、
彼女達の弾薬を輸送するトラックを一緒に連れてってくれ。」
「了解したわ指揮官、私に後で紅茶とチョコレートをお願いね♪」
そう言うと彼女達は走って司令室を出ていった。
「カリーナ、私達が来たときに使用したゲートにｓｔｇ４４の小隊が使用する弾薬を搭載した
トラックを廻してくれ。」
隣にたって補給関連の確認を取っていた妹に頼むと
意外な返答が来た。
「それなのですがｓｔｇ４４小隊の弾薬を載せたトラックは基地北側で指揮官の来たゲートは
南側なので基地西側で合流させた方が速いかと」
意外な提案に思わず見ない間に随分成長したな……と思いながら頷き
「そうしよう、オペレーターＦＡＬにトラックと基地西側で合流するように指示を出してくれ。」
ーーーーーーーーーー
１１４５
「突出部近隣の部隊の再編及び配置が完了しました」
「ｓｔｇ４４小隊が予定地点に到着、現在補給を行っています。」
「敵先頭集団がＦＡＬ小隊と交戦を開始、ハイエンドモデルがいる模様」
成る程、前線にもハイエンドが居るということは他にもいるのだろうな…
敵のこの攻勢はハイエンドが多くいるが故にこの規模に膨れ上がったのか……
「民間人の避難は？」

「現在七割がトラックに乗車し出発の用意が出来てます。」
「増援はどうなっている？」
「近隣の基地から急行中の部隊は三部隊が間もなく到着しますが、偶々この基地周辺の
　パトロールしていた軽装の部隊ですので……」
　オペレーターは少し言いにくそうにしている
「その三部隊全てを民間人の護衛にあてろ、それと現在補給で使っているトラックの
　二割を民間人の輸送に当てるように。」
「しかしそれでは補給に影響が……」
「今から指示する地点に補給物資集積地点を設置、影響が出ないように兵站線を再構築する。」
「ただし、右翼は突出部であるD―3に作る予定なので一時的にE―3に置き、突出部の殲滅後に
　D―3に移設する、集積所にはこの基地の一割の物質を置くように。」
「一割となるとここの基地が一日戦える量に当たりますが？」
「他の物資は引き上げます、前線部隊がここを通る時に行う最後の
　補給物資以外は引き上げます。」
「物資については補給課によって既に五割が梱包完了し後方の基地に輸送を始めています、
　他基地から輸送トラックが戻るのは遅くとも三時間後です。」
　カリーナの返答にしばし考えているとドローンから突出部の敵の分布がスクリーンに
　表示された…
「すぐさま攻撃部隊に口を閉じるように命令を。この基地の砲撃部隊に突出部後方のB―2．3に対し
　五分間の面制圧攻撃を命令。」
「本部より増援第一派が後方基地を通過、到着は三時間後の予定。」
「民間人を乗せたトラック、輸送を開始しました。」
「攻撃部隊敵後方へ進撃を開始、突破は砲撃終了後の予定です。」

１２００を過ぎ状況が動き始めた・・・
１２５０
暫くすると突出部の部隊を包囲殲滅が完了しＦＡＬが司令室に入って来た、少し服が汚れている。
「指揮官、だましたわね。」やはり怒っているようだ。
「すまないな、後々の為なんだ後一時間はこの戦線を維持しなければならないのでな・・・」
「おかげでハイエンドと近接する羽目になったのよ？今下がっても十分だと思うけど？」
「今の状況が維持できているのはこの基地の通信設備によって、戦況の把握が可能だからだ
今下がれば優位性が失われ追撃で被害がとんでもないことになる、それは避けたい。」
「いつ下がっても一緒でしょ？機会逃すんじゃないの？」
「いや、後４０分もすれば相手も再編成で下がるはずだ。」
「あの鉄血が？本当なの？」
「さすがにハイエンドモデル一体がやられたんだ２０分もすれば敵の攻撃が下火になる予想だ、
その段階で撤退の用意、その２０分後に総退却。」
「なんでそこまで予想できるの？」
「私の部隊を攻撃した部隊にいたハイエンドモデルが居た事と敵の動きが見たことある動きだ
敵の指揮官は私を以前攻撃した人物と一緒だろう・・・」
「そう・・・」
それっきりＦＡＬは沈黙した。１０分程すると
「敵の攻撃が弱まっています！」
「少し早かったか・・・ 全部隊に１０分で後退用意を済ませるように通達、それが終わったら
ここに居る人員も総員退去命令を出すように。」
「物資が少し積めていませんがどうしますか？」

「・・・資材庫の地下にあったやつか？」
「はい、搬出前でしたので・・・」
「残していけ、今は人員が最優先だ。」
１０分後、撤退を開始した全部隊は敵の一時的な後退に合わせるように戦線を離脱
陣地に仕掛けた置き土産や彼我の距離などにより鉄血はＳ―０９地区攻略後に侵攻を停止
これにより《Ｓ―０９のキセキ》は幕を閉じた・・・

7話　本部会議

５月○□日
～Ｓ―０９地区後方のＲ地区統括司令室～
１０２５
昨日の戦闘の後Ｓ―０９地区の撤退を成功した私たちは撤退した先の基地にて
借りた施設と送り出した物資を使い態勢を整えていた。
ヘリアンさんは《一時的な放棄》と言っていたので何時攻勢作戦が起きるにしろ早いうちに準備しておいたほうが良いからだろうと用意を進めていたのだが各方面との調整をしていた私に呼び出しが
かかった、何でも本部から私に本部への出頭命令が出たのである。
はて？と思いながらもこの地区の統括官殿に後を任せて私は本部へ
行くために車に乗り込んだ（引き継ぎの時、彼が顔真っ青にしてたのを気にしながら）
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
～Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ本部～
１２３５
本部に着いた私達（ＦＡＬ小隊含む）を迎えたのはヘリアンさんだった
「すまないが、歩きながら状況を説明する。」
そう言うと彼女は歩きだした、着いていきながら「何故呼び出しに？」と聞くと
「Ｓ―０９地区放棄は最初容認されていたのだが……君が鮮やかなバックハンドブローを
決めて尚且つ敵の一時的な攻勢停止に合わせての撤退戦で損害が全く出なかったせいで何故引いたかと幹部がうるさくてな……
君から説明してもらうしか無くなった、すまない。」
「いえ、そう言うことであればやぶさかではございません

して、反攻作戦はいつ頃になりますか？既に補充は逃亡した元指揮官が
溜め込んでいた資材を使いほぼ終わりつつあり攻撃プランもいくつか
草案が済み、各方面との調整が進んでますＲ地区統括官殿に聞いていただければ
どの程度進んでいるか分かる筈です。」
その言葉にヘリアンさんは立ち止まってこちらを見た、
はて？どこかに驚くところがあったかな？
「も、もうそこまで進んでいるのか？昨日の今日だぞ？本部は
まだＳ地区陥落で情報が止まっていた、なぜその情報が本部に来ないのだ。」
「本日０５００時には既に本部宛にメールと伝令で確実に伝わるように情報は
Ｒ地区統括官殿が送信したと私に彼が報告してくれましたが？」
ヘリアン（なぜ統括官が彼に従ってるんだ!?）
「いや、私とクルーガー氏は聞いてない……誰かが意図的に止めているな……
クルーガー氏には先にその事を伝えておこう。」
「ありがとうございます、因みに攻勢部隊は本日１５００時にはＳ地区との
境に配置がすみます、後は指揮官の選定と開始日時が決まれば何時でも、
ただし日数が過ぎれば奇襲効果は無くなりますので作戦は成功率が
下がり損害も大きくなることに御留意を。」
「分かった、ただ攻勢は直ぐは無いだろう……幹部は急な局面への対応が
出来ない指揮官だった者が多くてな２ヶ月近く後になるかもしれん。」
「むしろそれだけ遅ければ自然と鉄血の総数は下がりますので今の部

隊でも良いでしょう、地区の設備は全て破壊　されてるでしょが……」
「ここだ。」そう言い部屋に入るヘリアンさんに続いて入ると２０個程席が用意されていた。
「この椅子に座って待っていてくれ、直ぐに集まるはずだ
私はクルーガー氏と話してくる。」
そう言いヘリアンさんは退出した、彼女が出るとふと興味無さげにしてた幹部が皆こちらを見てきた。
居心地の悪さを感じながらも待っていると、ぞろぞろと他の幹部が入ってきた。
それから五分ほどたった頃ヘリアンさんとクルーガー氏が部屋に入ってきた
「会議を始める。」クルーガー氏の宣言と同時にヘリアンさんが立ち上がり
「今回集まったのは他でも無いＳ地区陥落に伴う方針決定の会議である
貴賤無き活発な発言を期待する。」
成る程先に私が発言することを容認すると牽制を一部幹部に投げ掛けたのか
存外強かなのだなと思っていると、遅れて入ってきた幹部の一人たった
「まずシリウス後方幕僚が何故Ｓ地区の指揮を取っていたのです、
彼処には指揮官が居たでしょう！越権行為では無いですかな。」
すると別の幹部が立ってこちらに捲し立てている幹部に向かって
「こちらにはその君の小飼の指揮官は敵前逃亡でＲ地区で拘束されてると聞いたがどうなのかね？」
と投げかけたことで、言葉に詰まった彼は
「ならば参謀役はどうしたのです彼は居たでしょう。」
と負けずに話している、これは私が答えないといけないかな？と思い手を
挙げると直ぐにクルーガー氏が頷いたので立ち上がり

未だに立ってこちらを睨んでくる幹部を無視して
「その参謀殿は私が司令室に行ったときには部屋の隅で何やらぶつぶつ呟いてましたので確認の
ために指揮を取りますか？と聞いたところ君に任せるといって司令室を出てしまわれましたが？」
流石に絶句したのかその幹部は座り込んでしまった。
「それと反攻作戦はいつ許可が降りるのでしょうか？
既に本日１５００をもって発動可能になりますが。」
その場を沈黙が支配した私より先に来ていた幹部は初めて聞いたと言ったような驚きを、
後から来た幹部は朝の報告しか聴いてないのか別の驚きかたをしている。
成る程、この半数近い前者がマトモな幹部か……
問題は……来たか。
「貴様は撤退までの指揮官の筈だ、何故攻勢計画を立てているのだ!!
第一に貴様がＳ地区から撤退しなければ良かったのだ！鉄血の三割近くを
倒したのに引くとはどう言うことだ！」
子供じみた言葉に私は呆れて彼を見ているとヘリアンさんの隣に座っている幹部が此方を見ながら言った。
「まぁまぁ、シュターデン指揮官もあまりお暑くならずに冷静に話しては如何かな、
フォーク指揮官もそこまで言うのなら反攻作戦はご自身が指揮をお取りになりますかな？」
その言葉に二人は黙ってしまった、畳み掛けるのは下策そうだ、彼らの名前も
分かったし補給関連で彼らの嗜好品を少し減らすぐらいは許されるかな？
等と考えているとどうやら反攻作戦の指揮官決めに話を進める事にしたらしい。
「では、Ｓ地区奪還の指揮は誰が取りますかな？」

「隣の地区の指揮官は無理だぞ、自分の地区も圧迫されているし
この規模だから誰かの指揮下に付くのが精々だ。」
「ミュッケンベルガー指揮官は？」
「彼は休暇で呼び戻そうにも三日は掛かる、それに漸く休暇を取らせたのに
呼び戻しては本末転倒だ、他の主だった指揮官も皆出払っている
早急に任じられるのは此所に居るものだけだ……」
「結論は出ているのではないのかな？彼に任せれば良いではないか。」
「だがヤツは！」「なら貴官がやれば良い」「し、しかし私では」
そんな会話を幹部がしているとそれまで黙っていたクルーガー氏が
「この件はシリウス後方幕僚に一任する、良いな？」
と言ったのを機に、意義なしとマトモな幹部達が言い押されるように
他の幹部も同調した。
「では解散、シリウス後方幕僚君は残りなさい。」
そう言うと幹部達はそそくさと退室していった。
「すまないな私の会社なのにああ言った者達がいつの間にか上位を
占めるようになっていてな、もし気に入らない事があれば私に言うか
後で彼らの嗜好品を減らすぐらいは赦そう」
「いえ、その御言葉だけでも助かります。」
良し抜こう、向こうが謝ってくるまでやってやるぞ
「では、私は戻らなければなりませんので。」
「奴等が何か仕掛けるかもしれん、見送りをしよう。」
「ありがとうございます。」
クルーガーさんは良い人だなと思いながらクルーガーさんに着いていくと
本当に何かするつもりだったのか彼等が通路に立っていたがクルーガーさんを
見ると散った、その姿を見てため息をしながら歩く彼に後で何か贈

るか
　なんて考えた、前方にトンプソンやＦＡＬが立っているのを見るとクルーガーさんが
「彼女達との仲は良いようだな」と切り出した。
「ええ、とても良くしてくれてます、良い子ばかりです。」
「彼女達を大切にしてくれ、人形だからと雑に扱うものもいるが彼女達も感情を持っている、
　大切にすれば彼女達もこたえてくれるだろう。」
「はい、胸に刻みます。」
「頼んだぞ薔薇の騎士殿」
　そう言うクルーガーさんに敬礼をしてから、彼女達が待つ場所へ向かった。

８話　Ｓ地区制圧後の引き継ぎと約束

奪還作戦と掃討戦を終えＳ地区奪還を終えた私達は後任の本部から来た指揮官に
引き継ぎ作業をしていた。
この中央基地は流石に半壊していたが鉄血は壊すことに夢中なあまり地下の放棄した
物資には気がつかなかったようだ、ただそこまでの通路も崩落している箇所があるために
再利用出来るようになるまで時間が掛かるが……無いよりはマシだろう。
幸いにもこの基地には他の地区からの緊急救援物資が多く送られてきた来た為に多少は
復興ペースが上がる筈だ。
ヘリアンさんが言うにはこの物資も作戦に当てられる予定だったらしいが最小限の消費で
作戦が終わった為にそのまま転用出来たそうだ。
後任の指揮官も一時的らしく７月からは４月に入社した新人にこの地区の担当を任せるらしい
こんな侵攻を受けた地区に新人を配属とはまた随分と期待されている新人ですなと
引き継ぎの際言ったところ今のところ研修の成績はトップレベルだそうなので
確かに期待の新人ですねと世間話に興じていた。
「指揮官、帰りのヘリが来たわよ」
ＦＡＬの呼び掛けにふとそちらを見ると確かにヘリが見えた。
「では指揮官殿、後はお任せします。」
「後方幕僚殿もお疲れさまでした、後は任せてください」
そう言葉を交わして私はヘリに乗り込んだ。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ本部

１２００
　着いたのがお昼になったのでクルーガーさんに連絡して報告の前に昼食をとる事になった。
「それで、指揮官いつ私にご褒美くれるのかしら？」
　いつぞやかの話を切り出してきたＦＡＬにそう言えば防衛戦の時にそんな話をしたなぁ、
　と思いだした。
「そうだな、取り寄せるのに時間が掛かるから届いたら誘う、それまで少し待っていてほしい。」
「まさか、天然物なの？」
「ん？そうだどちらも伝が有るから時間は少し掛かるが良いものが手に入る。」
「そ、楽しみにしてるわ。」
　少し頬を緩め嬉しそうに先を歩き出すＦＡＬに私は可愛いところが有るじゃないかと
　思っていると一緒にいたトンプソンがじっと此方を見ていた
「どうした？」
「いや、ボスはたらしなんだなと思っただけさ。」
「そうか？所でトンプソンは何か欲しいものは有るか？」
「私は……そうだな、ボス私とデートしないか？」
　急に言ってくるので驚きながらも「私と？」と聞いたが「そうだ。」と返してくるだけだった。
　暫しの沈黙の後、「落ち着いたら予定を連絡する、それで良いか？」
「分かった、待ってるぞ。」
　トンプソンはＦＡＬを追うように小走りでその場を後にした、耳が赤くなっていたのを
　見て意外にもうぶなのだなぁと思っていると「しきか～ん、早く来なさ～い、置いていくわよ～？」
　と言うＦＡＬに「今行く」そう言い彼女の後を追った。

9話　本部後方幕僚正式配属

S地区攻防戦から早一週間が経ちヘリアンさんの直属として
忙しい毎日を送っていたが、明らかに書類の量が増えているので
おかしいと思い調べたところ、あの会議の時に突っかかって来た
幹部の仕事が流れてきていた、そこでヘリアンさんに相談し
流されてきた書類は基本私の名前で決裁していいらしく、
ヘリアンさんの連名にすることで向こうが何か言ってきても
ヘリアンさんが対応してくれるらしいので遠慮なく決裁を
始めた。
「済まないなシリウス、本来なら私が気付かなければいけない
事案なのだが、助かった」
そういう彼女はここ最近睡眠時間が少ないのか隈が出来ていた。
「そんなことよりヘリアントス上級代行官殿この後は書類決裁だけで
？」
「ん？そうだ、急ぎはないがしなければどこかで遅れが出てしまうの
でな」
「私が出来るところは変わりますので一旦お休み下さい、隈が凄いで
すよ？
せっかくの美人が台無しですよ。」

「き、急に何を言い出すかと思えば美人だなんて言うとは、しかし・・・」
「はぁ、トンプソン」「なんだボス」
傍のデスクで作業をしていた彼女を呼ぶと直ぐに立ち上がり此方
に歩み寄って来た
「ヘリアントス上級代行官は仮眠を取られる、お連れして差し上げ
ろ。」
その言葉に合点がいったのか「わかった」と言いヘリアンさんを連
れてく為に
彼女ににじり寄り、上位権限で止める間もなく担がれ部屋を出て
行った。

「優しいのね、シリウスは。」「彼女に倒れられると困る。」
からかうＦＡＬに澄まして言うと、彼女は面白くなさそうな表情をした
「惚れたから優しくしてるのかと思ってたのよ私達は。」
「彼女には私よりも釣り合う人が居るだろう？」
「彼女は合コン連敗者として有名なのよ？知らなかったの？」
意外なものを見るようにこちらを見るＦＡＬ
「それはアレだ、男どもに見る目が無かったんだろう。」
「そう、ヘリアンに貴方が悪くないって言ってたって伝えとくわ。」
「そんなことよりも、明日届くんだが・・・ 明後日どうだ？」
「明後日は私も空いてるから問題ないわ。」
話を変える私にクスリと笑いながらそう言えば・・・ と、きりだした。
「トンプソンとのデートは何時にしたの？」
ＦＡＬにそれを聞かれるとは思わなかった私は彼女に聞いたのか？と問うた。
「えぇ、私の部隊と彼女の部隊は聴いてる筈よ、嬉しそうに話していたし。」
「次の休みで予定があった時に・・・ だ。」
「あら。私は後でもよかったのよ？」
「そんなこと出来る訳無いだろう、先に約束したのは君とだ、それに・・・
私も久しぶりの天然物でね、待ちきれないのだよ。」
「そ、そうそれは良かったわね。」
少しだけどもる彼女に疑問を感じるもトンプソンが戻って来たのを
機に会話は途切れキーボードのカタカタしたと音がその場に響いていた・・・

１０話　補給不足

その日は休みの筈だったのに気がつけば何故か私は仕事をしていた……

～朝：自室～

０９００

コンコンコン…

朝から誰だろう？今日は休みで不正を行っていた指揮官数人の証拠を見つけ出し

何時でも拘束できる準備をして後は捕まえるだけでその後はヘリアンさんが

全てやってくれると言って居たのだが…

「はぁい、シリウス残念だけど今日の休暇は後日に変更になったわ、支度をして」

そこにいたのはＵＭＰ４５だった…　あれ？今休みは後日って…問題が起きたのか。

少し落ち込みながら着替えをするために部屋に戻った、４５には待っててくれと言ってから…

着替えていると後ろから物音がしたので振り替えると４５が立っていた…？

「あら、良いカラダしてるのね」

「いや、何普通に部屋に入ってんの？」

「待つのも暇だったのよ、それと嗜好品の仕入れをお願いしたいのだけど、大丈夫？」

「それを理由で入って良いとはいけないのだがな…　何が欲しいんだ？」

「チョコレートケーキと紅茶を。」

「どこで聴いたんだい？」

「貴方とＦＡＬが話してる時にね、少し位良いでしょ？」

確かに多めに作るから良いんだが…

「分かった、ＦＡＬの後にな」

「約束よ♪」
　さて着替えも終わったし
「曲がってるわよ。」
　そう言い４５がネクタイを弄ってくる
「盗聴機は無しだぞ。」
「あら、そんなことするとでも？曲がってるのは事実よ」
「それなら良いんだが。」
　若干悔しそうな表情が少し出ている４５、ばれたのが意外だったのかな？
「これで良し、行きましょ。」
　そう言いポンポンと胸を叩いてくる。
　部屋を出ると他の４５の小隊のメンバーが立っていた
「おはようございます、ヘリアンから早くシリウスを連れてこいと催促が来てるわよ？」
「なんで私に直接連絡しないのかな？」
「さぁ？行けば分かるんじゃない？」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

～作戦司令室～
０９３５
　普段は執務室だからこの部屋に来るのは二度目だ
「おはようシリウス、せっかくの休暇だったのにすまないな」
「おはようございますクルーガーさん、私を呼び出した理由を聞いても？」
「それはヘリアンが来てからな・・・　少し待ってくれ。」
　それから１０分程してヘリアンさんが司令室に駆け込んできた。
「おはようシリウス、呼び出してすまないな連絡する間がなかったのでＵＭＰ４５達に
　頼んだんだが大丈夫だったか？」
「えぇ、彼女達とは何度か出会ってますので。」
「そうだのか・・・　クルーガーさん分かっただけでも２０近い基地がギリギリです。」

「さて・・・ シリウス、君を呼んだのは他でもないあの不正をしていた者達のしわ寄せを受けていた
　基地が２０近くある。」
「溜め込んでいたのではなく他の基地への補給物資をちょろまかしていたわけですか……」
「そうだ、おまけにさらなる物資が欲しければ欲しければ購入しろと幹部の一人が言っていたせいで
　話が拗れている、各基地の司令はお前を出せと言ってきてな・・・ それで呼んだわけだ。」
「私の仕事は各基地への輸送計画作成と調整ですか？」
「それと今後、彼等の補給の窓口もある彼等が信じられるのは君だけだからな。」
「私は彼等に何かしたわけではないのですが？」
「彼等に強く当たっていた者達の不正の証拠を集め逮捕させた、
　それに本部にいるもので前線指揮が上手いのは君しか名が知られて無いのだ。
　彼らからすれば物資が無い状況で戦うことが出来ないことを良く知る人物に
　補給の担当をして欲しいと思うのは必然だろう。」
「それで基地はバラバラなのですか？」
「いやある程度纏まっている、中には隣同士の所もある。」
「なら途中までは纏められますね、直ぐに計画を作りますので基地の場所と地図を下さい。」
「済まないが頼んだぞ。」
　そう言いクルーガーさんは出て行った。
「この埋め合わせは後で私が出来る範囲でしよう。」
「デートでも？」
「で、デート？わ、私と？本気か？」
「ふふ、「何故笑う！」本気と取るかどうかはお任せしますよ。」
　ヘリアンさんをからかうのは楽しいね、顔真っ赤にしてるよ・・・ 私もだけどね。

この時私は計画作成に気を取られるあまりいつの間にか居たＵｍＰ４５がニヤついて
こちらを見ていたこと、そして端末を使い誰かに連絡を取っていた事に気が付かなかった・・・

妹が突撃してくるまであと５分・・・

11話　短期出向

補給問題発生から早一週間が経ちそれぞれの基地の不足している物資が届き
各基地の司令からは感謝の言葉が来ている、ひとまずの問題は解決ししばらくは
大丈夫、そう思いながらスクリーンに映る最後の連絡をしている基地の指揮官と
話していると、端末にヘリアンさんから執務室に来るようにメッセージが届いた。
また問題でも発生したのかと顔をしかめていると『何かありましたか？』と
スクリーンの向こうの彼女に心配をされてしまった。
「いや、ヘリアントス上級代行官殿からの呼び出しの連絡が来たので
また問題発生かな？と思いまして」
『シリウス後方幕僚が問題を解決する度に助かる人が居ますから、頑張って下さい。』
「その言葉だけでも救われます、ではまた補給の連絡の時に。」
そう言い通信を切る、何故か周りがいちゃつくなと言わんばかりに見てくるが
はて？そんなところあったかな・・・
「私宛に連絡があったら端末に連絡お願いします」
「わかりました。」
いいから早く行けと言わんばかりの空気から逃げるように部屋を後にした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

～ヘリアントス執務室～

「良く来てくれた、実は言いにくいのだが・・・」
「告白ですか？」
「ち、違う・・・　困った事が発生してな、その対応を任せたいのだ。」
「その内容は？」

「依然会議の時に君に何故後退してから攻撃することで一時的な損失が増えたと
　問題にした指揮官が居たのを覚えているか？」
「シュターデン指揮官でしたっけ？」
「そうだ、あの指揮官は基本的には穏健派に近いが勘違いした指揮官達に担がれている、
　問題はそこなんだ。」
「担がれていることが？」
「担いでいる者が問題を起こしたとき必ず名前を出され関係なくても対応せざるおえない
　こんな馬鹿共に担がれても嬉しくないといつも愚痴をこぼしている。
　今回はそんな彼が疲労で倒れてしまってな一時的な指揮代行官として彼の基地に赴き、
　彼の見舞いと業務の代行が任務だ、基地の人形は皆シュターデン指揮官に
　同情的なので過激派の指揮官への情報漏洩は無いだろうあるとすれば盗聴盗撮だ
　そこら辺は４０・・・　４５達の小隊とウィルロッドを同行させるので問題ないだろう。」
「あー・・・　４０４、に関しては知ってますので言い直す事もないかと。」
「何故知ってる。」
「少し前にちょっとだけ関わりましたので・・・」
「そ、そうか。」
　少し頭を抱える彼女に気まずいながらも話しかける。
「まぁまぁ、彼女達とウィルロッドなら諜報関係は問題ないでしょうから、それで今から？」
「そうだ、君が来るまでベットの上から指示を出し続けると言われてな
　早く変わってやって欲しい、君が抜き打ち調査に来たとき倒れた事

にする
　過激派に指揮権を与えてはならん、やらかすに決まっている。」
「信用がありませんね・・・」
「問題を次から次へと起こすことに関してはは信用している」
　意外と辛辣な事をおっしゃる。
「シュターデン指揮官は君を高く評価している、今のうちに心象を良くしておくことだ。」
「分かりました、ちなみに過激派が仕掛けてきた場合はいかがしますか？」
「ないと思いたいが・・・　その場合は拘束して私に報告を頼む。」
「今回は容赦無く、宜しいのですね？」
「君が入ったお陰で君の知り合いがこの会社に入りたいと打診してくることが多くてな
　いっその事すげ替えても良いと思ってる、ただヤツ等にそう伝えても無駄に反発するだけ
　だろうからまだ伝えていない、知っているのはクルーガーさんとカリーナ含む数人の
　後方幕僚だけだ。」
「わかりました、何かありましたら連絡します。」
「ん、頼んだぞ。」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「只今を持って着任致しました、シリウスです一週間程の予定ですが宜しくお願い致します。」
「うむ、この基地の責任者のシュターデンだ宜しく頼む。」
　白く清潔な部屋にほのかに香るアルコールの匂い、そうここは医務室だ、暫しの沈黙の後
「やはり、ベッドの上では格好もつかんな。」
　そう言い苦笑する彼に少し同情してしまった。
　前にあった時より増えている白髪に隈が有り少し老け込んで見える。
「貴官には苦労を掛けることになる、悪いが頼むそれと代行中の責任

は私が取るので
　何かあったら事後報告でいいから報告を頼む。」
「御相談しなくてよろしいので？」
「貴官ならば問題あるまい、その時最善と思う事をすると良い。」
「分かりました、基地の事でお聞きしたいことがいくつかあるのですが・・・」
「何でも聞くといい。」
　そうしてこの基地に関する話を始めた・・・